

思考力・判断力・表現力を促す Writing 指導の工夫

土屋 進一

1. はじめに

新学習指導要領では、育成を目指す資質・能力の「三つの柱」として「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」及び「学びに向かう力、人間性等」が掲げられている。外国語によるコミュニケーションにおける4技能の1つ「話すこと」は、「話すこと[やり取り]」と「話すこと[発表]」に分けて示され、4技能5領域を統合しながら、「主体的・対話的で深い学び」を促す授業の実現が求められている。

しかし、育成した「知識及び技能」をどのように「思考力、判断力、表現力等」を伴った活動に落とし込んでいくのかについて、頭を悩ませている先生方も多いのではないだろうか。

本稿では、『三訂版 入試必携 英作文 Write to the Point』（以下『必携英作文』）を使用した、「思考力、判断力、表現力等」を促す、「書くこと」の具体的な指導例を提示したい。

2. 『必携英作文』の構成と授業の進め方

使用テキスト『必携英作文』は、英作文のテーマごとに見開き2ページで左側にポイント解説、右側に EXERCISES A(誤文訂正問題と基本レベルの和文英訳)が、次の見開き2ページで EXERCISES Bとして少し長めの和文英訳が設けられている。

生徒には、予習として自分のノートに答案を作成することを課し、授業で EXERCISES A の誤文訂正問題に関して、日本人教師が左ページのポイントを踏まえてコンパクトに解説をする。続く和文英訳の問題に関しては、授業前にあらかじめ指名された生徒が自分の答案を黒板に書いておき、ALT と日本人英語教師がその場で添削をしながら、コンテキストに合った単語の使用方法や適切な文法・語法を解説する。その後、別解の可能性や疑問点の解消のため、生徒側からの質問を受け付け、英語や日本語でディスカッションを行い、一応の生徒側の納得を

得てから次の設問へと進んでいく。

3. 『必携英作文』を使用した発展的 Writing 活動

先述したような授業の進め方は、これまでの伝統的な英作文の授業では、概してオーソドックスなものであろう。1学期の生徒の反応は、答案に対して ALT のオーセンティックなフィードバックが得られること、また、日本人教師から文法・語法に関する明示的なフィードバックが得られること、そして、疑問点についてディスカッションという形で納得解を得られることなどから好感触で、有意義な授業であると教師側も手応えを感じていた。

しかしながら、2学期に入り生徒の Writing 力が向上するにつれ、次第に生徒がパターン化された授業展開に単調さを感じ始めたことに教師側も気づき始めた。そのとき、生徒の興味・関心をさらに高める工夫として試みたのが、以下の3つの発展的学習である。

1つめは、本誌の甲斐(2016)で紹介されていた、『必携英作文』の設問の状況例を活用した対話づくりである。これは、和文英訳をした文の続きを対話形式で考え、表現する活動である。この活動は、「思考力・判断力・表現力等」を伴い、生徒は楽しそうに「自由英作文」に取り組んでいた。書き終わると、ALT にロールプレイに参加してもらい、自分の書いた英文がきちんとネイティブスピーカーに伝わるかどうかを試すスピーキングの機会も設け、より実践的な生きた英語を生み出すことに成功した。

2つめは、先の甲斐(2016)の活動を応用したもので、和文英訳問題の解答を対話者 A の発言とみなし、それに続く対話者 B、C の発言をペアで順に考える活動である。意味のある、談話形式のまとまった対話文をつくるこの活動は、単なる個人ワークではなく、ペアでの協働的な活動となるため、「主体的・対話的で深い学び」を促す活動となり、クラス

全体が活気ある雰囲気にも包まれた。具体的な取り組み例を以下に紹介する。

17 重要表現(2) it を用いるもの

EXERCISES B

発展学習：対話者 B と対話者 C の立場になり、対話者 B は、対話者 A への応答を、対話者 C は、対話者 B への応答を自由に考え、英語で書きましょう。

(2) 人間の命に限りがあるとの意識が出てきたときに、人生を大切に作る姿勢が生まれる。

【状況例】 エッセイストが、「老い」について述べている。

A : It is not until you realize that you cannot live forever that you really make the most of your life.

B :

C :

(以下省略)

【生徒答案 1】

B : I see. We had better enjoy our lives. What do you want to do before you die? I want to do a bungee jump!

C : Oh, really? I want to fly high in the sky, eat a lot of food, and marry a tall handsome man if I can find a man.

【生徒答案 2】

B : That's right. You should live as if you were to die tomorrow said by Gandhi.

C : I think so. I'm inspired to live the best way in my limited life.

3 つめは、Further Exercise や巻末の「発展編 自由英作文 頻出テーマと演習」の各テーマを用い

た、グループでの Essay Writing 活動である。3 名で 1 つのグループをつくり、① Introduction ② Body ③ Conclusion のどの部分を担当するかを決め、グループ全員で協力しながら Writing 活動を行う。以下は、実際に使用したハンドアウトの一部である。

Persuasive Writing 高3 英語科 英語表現

発展学習：グループで次のテーマから 1 つを選び、① Introduction ② Body ③ Conclusion のどの部分を担当するかを決め、グループ全員で協力しながら原稿をつくりましょう。最後にクラス全体の前でグループ発表をしてもらいます。

【テーマ】

1. Does the Internet have a positive effect on modern society?
2. Is space exploration a waste of money?
3. What should we do to address Japan's low birthrate?
4. What should we do to solve the aging society in Japan?
5. What should we do to solve global warming?

【役割分担】

- ① Introduction 担当者名：()
- ② Body 担当者名：()
- ③ Conclusion 担当者名：()

【グループディスカッション用メモ】

(以下省略)

この活動で特筆すべきことは、説得力のある原稿に仕上げるため、生徒が主体的にテーマを選び、グループで対話をし、個人レベルで深い学びが得られる点である。最後にクラス全体の前でグループ発表

をすることを告知しておく、かなり集中して課題に取り組む生徒の姿が見られる。以下に、振り返りシートの生徒のコメントから、有益だと思われるものを挙げておく。

「Body をみんなで考えたり、同じ内容でも表現がたくさんできてきたりするの面白かったです。」

「同じ内容でも発表している内容が異なったり、その違いに気づいたりするのが楽しかったです。」

「1人よりも3人のほうがたくさんの意見が出て、自分が思いつかないようなアイデアが出てきて人それぞれの感性の違いを知るの楽しいなと思いました。」

(「振り返りシート」より)

4. 今後の英語教育への示唆

これまで、『必携英作文』を使用した、「書くこと」のより効果的な指導について論じてきた。

上記の生徒の振り返りのコメントからもわかるように、「書くこと」を通して、課題となる情報を的確に理解するだけでなく、「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動を少しの工夫で引き出すことができると感じた。また、様々な考えを共有しながらコミュニケーションを図り、自分の考えを表現することが、新学習指導要領が目指す「Society 5.0時代に使える英語」の礎の1つとなるのではないだろうか。

5. 動画配信型授業での Writing 指導の可能性

今春、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言の発令を受け、臨時休校を余儀なくされた学校現場は一変した。本稿の締めくくりとして、臨時休校中に本校で実際に行われた動画配信型の Writing 指導について述べたい。

① 課題つき動画配信型授業

これは、主に「英語表現」の授業で行われた。オンラインでのオールイングリッシュによる授業は、回線や電波の状況により、日本人教師の発話する英語がクリアでなくなる可能性を鑑み、なかなか思い切って踏み切れなかった先生方も多かったのではないだろうか。それを逆手に取ったのが、この「課題つき動画配信型」授業である。ALT であるならば、使用言語が英語である必然性があり、生徒も、たとえ電波の状況が悪くともなんとかして聞き取ろうと

するであろう。そこで、新学期ということもあり、ALT による自己紹介動画を作成した。動画視聴後に ALT への質問を考える Writing を課題とし、動画視聴への集中度を増す仕掛けとした。生徒は ALT への質問を Google Forms で送信する。そしてその質問が、ALT が生徒へフィードバックをする内容の次の授業動画へとつながる。Listening と Writing が一体となったオンラインならではの授業であったと言える。

② ALT による英作文添削指導

Google Classroom の課題機能を用い、Writing 課題を配信する。生徒が課題を提出すると、ALT に添削を依頼し、生徒へフィードバックする。シンプルだが、自宅学習での取り組みが教員と生徒の双方向のやり取りを可能にし、学校と生徒をつなぐ重要なツールとして機能した事例であろう。また、紙ベースではなく、データとして生徒の手もとに確実に残るため、ポートフォリオとしての活用もでき、学校再開時の指導の際にも十分活用することができた。

6. おわりに

本稿では、思考力・判断力・表現力を促す Writing 指導の実践例について述べた。コロナ禍でオンライン授業の現実に直面したとき、教員自身が答えのない問題に立ち向かわなければならず、「思考力・判断力・表現力」が問われた。私たち教員もこの教訓を活かし、今後の新しい英語授業を考える必要があるだろう。

参考文献

- 甲斐順(2016). 『改訂版 入試必携 英作文 Write to the Point』を活用した取組一状況例を活用した対話作りと自由英作文―『チャートネットワーク』80号, 数研出版.
- 土屋進一(2020). 「緊急事態宣言下で英語授業はどのように行われたか」『英語教育』8月号, 大修館書店.

(西武学園文理中学高等学校 教諭)